

福岡大学法学部

国際コミュニケーション海外研修 2025

報告書



日程

2025 年 8 月 6 日 — 8 月 21 日

Date	Morning Activity	Afternoon Activity
6-Aug	Depart Fukuoka Arrive at Haneda Depart from Haneda Arrive at Seattle - Delta 166 10:05am	Room: ADAL 116 - Stuart T.Rolfe Community Room Arrive at Seattle - SeaTac Airport 13:00 Bellarmine Dorm Orientation & Check-In 15:00 SU Campus Tour - Student Leaders
7-Aug	Room: ADAL 116 - Stuart T.Rolfe Community Room 09:00 Bellarmine Check-Out 10:00 Meet at the ISSC Lounge 10:30 - 12:00 SU Program Orientation	Room: ADAL 116 - Stuart T.Rolfe Community Room 12:30 Welcome Reception Lunch 14:00 - 14:45 Tour of SU Law School - Meet in front of the Law School 15:30 - 16:30 InterCultural Homestays - Orientation with Eileen Beaupre 16:30 - 17:30 Homestay Family PickUp - Bellarmine Circle
8-Aug	Room: ADAL 116 - Stuart T.Rolfe Community Room 08:00 Meet at the ISSC Lounge 08:30 Go to ADAL 116 - Stuart T.Rolfe Community Room 09:30 - 11:30 America Cultural Program Interviews on Bainbridge Ferry under the guidance of the ISSC Site Instructor 12:00 - 12:30 Debrief - SU ISSC Site instructor	Room: ADAL 116 - Stuart T.Rolfe Community Room 14:30 - 15:50 Group A: Bellevue School District Interview Guidance with the ISSC Site Instructor 14:30 - 15:50 Group B: EVO Interview Guidance with the ISSC Site Instructor Guidance with the ISSC Site Instructor

9-Aug	Free	Free
10-Aug	Free	Free
11-Aug	Room: ADAL 116 - Stuart T.Rolfe Community Room	Room: ADAL 116 - Stuart T.Rolfe Community Room
	Dress Up Day 08:30 Meet at SU ISSC Lounge 9:00 - 10:30 : Group D Uwajimaya Group Interview 11:30 - 1:00 : Group E: Komo 4 Interview by Tyrah Majors - Coming to campus Guidance with the ISSC Site Instructor	Dress Up Day 13:00 - 14:30 Group F: SU Athlete Department 15:30 - 16:30 Rep Sharon Santos' Preparation Guidance with the ISSC Site Instructor
12-Aug	Room: SINE 110	Room: SINE 110
	08:30 Meet at the ISSC Lounge 09:00 - 10:30 Frank Shih's Presentation & Debrief with ISSC ELS Instructor 10:40 - 11:40 Oral Presentation Skills - SU ISSC Site instructor 12:00	12:30 - 13:40 Presentations Preparations I 14:00 - 15:30 Lecture by Commissioner Johnston on the Washington State Court System 15:30 - 16:00 Debrief with SU ISSC Instructor
13-Aug	Room: Boeing	
	9:00 - 10:30 Albers Presentation by Menakshi Rishi Debrief with ISSC Site Instructor 10:30 - 12:00 Presentation Preparations	12:15 - 13:15 Lunch with Judge Ketu Shah 13:00 - 15:00 View Court Trial 15:30 - 16:00 Debrief with SU ISSC Instructor
14-Aug	Room: Boeing	Room: SINE 110
	Dress Up Day 08:30 Meet at in front of Uniqlo 09:00 - 12:00 Federal District Court Visit (Talk with Judge Vaughn and	13:00 - 14:00 Minidoka Pilgrimage Presentation by Dale Watanabe & Debrief with ISSC site Instructor 14:30 - 16:00 Oral Presentation Skills - SU ISSC Site instructor

	attend a trial with Judge Tsuchida)	
15-Aug	09:30 - 11:00 Lecture Japan Consulate General & Japanese Economic Consulate Q. & A. Travis Doty 11:00 Back to campus	Room: ADAL 116 - Stuart T.Rolfe Community Room 13:00 - 16:00 Presentation Preparations
16-Aug	Free	Free
17-Aug	Free	Free
18-Aug	Room: ADAL 116 - Stuart T.Rolfe Community Room 09:00 Meet at SU ISSC Lounge 09:30 - 11:00 Law Presentation by SU Professor Mark Chinen 11:00 - 12:00 Debriefing by SU ISSC Site Instructor	Room: STCN 160 13:00 - 16:00 Presentation Preparations
19-Aug	Room: STCN 130 09:00 - 11:00 Oral Presentations 11:00 - 11:30 Discussion & Debrief by ISSC ESL Instructor 11:30 - 11:50 Program Wrap-Up	Room: STCN 160 12:00 Closing Ceremony and Lunch
20-Aug	Depart from Seattle - Delta 167 at 11:40am	
21-Aug		Arrive at Haneda and Depart for Fukuoka the same evening

ご挨拶

国際コミュニケーション海外研修担当
教授 梶島洋美

2025 年のシアトル研修に参加したチーム全員の素晴らしい成果に対し、心よりお祝い申し上げます。みなさんの努力、貢献、そして協力が大きな成果をもたらしました。今回はステファニー・ウェストン先生から海外フィールドワークプロジェクトを引き継いだ初めての年でした。ウェストン先生の温かいご支援のおかげで、シアトルプログラムを無事に終えることができました。



これまで 20 年以上にわたり大学で教鞭をとってきましたが、そのほとんどは大学院生に対する教育でした。当初は学部 1 年生中心のクラスをうまく回していけるか不安でした。参加者のみなさんが理解しスキルを伸ばせる適切なレベルをどこに設定すればよいか全く見当がつかなかったからです。後日、授業を見学した方から「学部 3-4 年生以上のレベルで教えているようだ」と指摘され、高めのレベルに設定したことを申し訳なく思いました。しかし 2025 年シアトルプログラムに参加した学生たちは、私の授業に必死についてこようと努力し、私の期待を裏切りませんでした。その結果、シアトルでの 2 週間、授業でも企業インタビューでも素晴らしい成果を示し、シアトル大学留学生センターのワタナベセンター長とブイ副センター長から「最高のパフォーマンスを見せた学生たち」と称賛されました。

このプログラムが、彼らが今後様々な挑戦に立ち向かうきっかけとなることを願っています。最後になりましたが、シアトル大学のデール・ワタナベ、サンドラ・ブイ、エイミー・ツジ、モリーンほか学生リーダー各位、インターカルチュラル・ホームステイサービスのアイリーン・ボウプレ、ならびに福岡大学関係者の皆様に御礼申し上げます。

名誉教授 ステファニー A. ウェストン（日米関係論）

今回行われた第 25 回プログラムにより、2001 年からの参加学生数は 475 名に達しました。（2001-2008 年：ジョージ・ワシントン大学 144 名；2009-2019 年および 2023-2025 年：シアトル大学 298 名、2020-2022 年：パンデミックの影響により福岡大学のみ 33 名）[1]。私は 2025 年 3 月に退職しましたが、24 年間プログラムコーディネーターを務めた後、現在も非常勤講師として活動を続けています。今年、後任の梶島洋美教授



がシアトルで実施した夏季実践研修プログラム(2025年8月6日~21日)を支援できたことをうれしく思います。この実践研修は、特に米国法・政策・社会正義・文化に焦点を当てるとともに、学者・行政官・政府関係者・ビジネスパーソン・学生アシスタント・インターンとの交流やホームステイを通じたグローバルコミュニケーションを促進するものです。

長年にわたり、シアトル大学留学生・研究者交流センター所長のデール・ワタナベ氏とそのスタッフ、ならびに異文化ホームステイ・サービス社社長のアイリーン・ボウプレ氏と今年度再び協働できたことは幸いでした。プログラム参加者が得る貴重な経験は、新たな発想を生み、視野を広げ、異文化交流を通じてグローバル社会に貢献しています。

[1] FU Business Law Program in Seattle and Fukuoka-24 Generations, Fukuoka University, November 20, 2024, p. 2.

シアトル大学 現地インストラクター リア ホランダール

福岡大学プログラムの現地責任者として初めて携わった今年度は、非常にやりがいのある経験となりました。学生たちがシアトルで過ごす間、文化に関する議論の導き、見学への同行、振り返りセッションの進行、学習体験の考察支援など、あらゆる面でサポートする機会を得ました。



全てが異なる外国で生活することの難しさを理解しているからこそ、学生たちの勇気と熱意には心から感銘を受けました。新たな経験を受け入れ、自らの居心地の良い領域から踏み出す彼らの姿勢は、私の心に深く刻まれました。この勇気と好奇心が、彼らの将来の目標達成に必ずや役立つと確信しています。

シアトル大学と福岡大学のこの意義深い連携の一端を担えたことを光栄に思うと同時に、プログラムを通じて育まれた成長、絆、そして異文化理解の深化を目の当たりにできたことに感謝しています。

シアトルでお世話になった方々

シアトル大学 留学センター シアトル大学 留学センター

センター長

デイル ワタナベ



副センター長

サンドラ ブイ



シアトル大学 留学センター

グローバルプログラム

シニアアドバイザー

エイミー ツジ



インターカルチュラルホームステイズ & サービス シーズ

代表

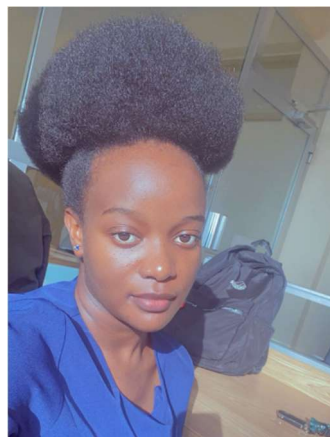
アイリーン ボウプレ



シアトル大学 留学センター

プログラムコーディネーター

モウリーン ムクリア



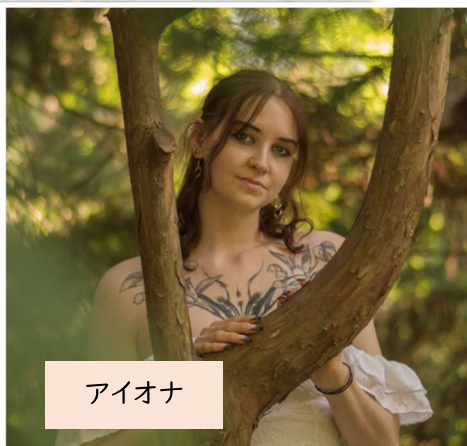
シアトル大学の学生のみなさん



アダム



フユミ



アイオナ



ギャビ



マナセ



ヤサー



マイカ

2025 年福岡大学法学部シアトル研修

学生リーダー 岡部 紗花

学生副リーダー 工藤 悠士

下記の学生が良好なパフォーマンスについて表彰されました

優秀参加賞 袁 淳岳

最優秀成長賞 岡部 紗花

最優秀成長賞 田中 陽代

最優秀成長賞 細永 柚菜

卓越リーダーシップ賞 岡部 紗花



グループインタビュー

2025 年のプログラムに参加した 18 名は、3 名ずつの 6 グループに分かれて、企業・団体インタビューを行いました。4 月の学期当初から、グループごとのテーマとサブテーマ、インタビュー先、インタビュー内容を検討、構成してから先方へ依頼し、現地ではシアトル大学の学生もグループインタビューに参加し、福岡大学の学生たちをサポートしました。

【訪問先】

- A グループ Bellevue School District (リーダー エ藤悠士)
- B グループ Evo (リーダー 荒木優衣)
- C グループ Anthem Coffee (リーダー 袁淳岳)
- D グループ Uwajimaya (リーダー 岡部紗花)
- E グループ Komo TV (リーダー 成松真央)
- F グループ Department of Athletics, Seattle University (リーダー 山城乃輝)



A グループ(工藤、豊見山、杉山)

私たちは、メンバー3人のそれぞれ興味のある分野を融合させ、教育・行政・IT の分野に共通している IT 教育について取り組んでいる団体を訪問の候補として選んだ。ベルビュー地区の教育委員会は、ベルビュー地区全域の学校や教育行政を統括する機関として機能しており、元教員や元校長など教育分野に精通した豊富な経験をもつ人々が多く働いている。コロナ禍に急速に進んだオンライン授業や地方の支援などを含む様々な取り組みを行っていることからこの団体を選んだ。

ベルビュー学区では AI を活用した先進的な授業が幼少期から実施されていることが分かった。幼い段階からデジタルデバイスに触れることで、学習意欲の維持や、コンピュータープログラミングへの関心につながると考えられている。また、地域産業に即したカリキュラムが提供されており、専門的な教師が不足している地域では、週に 2 回、オンライン授業が開校されている。



たとえば農村部では、AI と農業を関連づけた学習内容を導入するなどの工夫が見られる。農業を目指す生徒にとって AI はあまり必要のないもののように見えるが、AI と農業を結び付けられる方法を授業を通して模索していくようだ。一方で、教育における AI 活用をさらに進めていくためには、AI を利用した不正行為への対応が大きな課題であると指摘されている。責任の所在や倫理観のなさをどう補完していくか今後考えていくそうだ。

今回のベルビュー学区でのインタビューを通して、アメリカの教育現場が直面している課題と、その中での工夫を知ることができた。特に印象的だったのは、テクノロジー教育が単なる知識の習得ではなく、生徒一人ひとりの興味や人間的成長に重きを置いている点である。企業と連携して学びを現実世界につなげたり、クラブ活動を通して学び直しの機会を与えたりと、生徒の多様な選択を尊重している姿勢に共感した。また、都市と地方の格差や教師不足といった課題に対しても、オンライン授業や外部協力で乗り越えようとする柔軟さを感じた。教育は技術だけでなく、人を支え、社会の公正さをつくる営みなのだと改めて実感した。アメリカの行政機関の特徴として、都市の学校支援ももちろん充実したプログラムを進めているが、広い土地を有するというアメリカならではの課題に対して積極的に取り組み、田舎への人材派遣や生徒の経験づくりなどにも注力しており、大きな政府のような印象を強く感じた。

B グループ(荒木、中村、吉津)

私たちは Promotion of the EVO Exceptional Retailing Concept をテーマとし、各班員が関心を持った「経営」「地域との関わり」「今後の方向性」の3つのサブテーマに基づいて企業を訪問した。訪問したのは、アウトドア用品やスポーツ用品を販売する企業 evo である。evo は単に物を売るだけでなく、地域コミュニティの拠点としての役割を果たしている。具体的に、アート展示や映画上映、スケートボードイベントなどを開催し、人々が自然に集まり交流できる場を提供している。また、社会貢献の活動にも積極的に取り組んでおり、その姿勢に強く関心を抱いたため、evo を訪問先にした。evo のオーナーであるブライス・フィリップスさんは、企業の強みとして創造性や粘り強さを挙げていた。一方で、財務管理や技術などの様々な課題に直面してきた中で重要なのは、課題そのものではなくそれにどう対応するかであると強調していた。試行錯誤を重ねる中で成長し、今まで多くの学びを得てきたという evo の歴史を学んだ。Evo の根幹には「地域を大切にする」という理念がある。その象徴的な言葉が『invitation』であり、「誰もが歓迎される」という意味を持つことをフィリップスさんは説明された。映画や音楽、アートイベントを通じて、人々が集まり繋がる空間を作り出しており、それが大きな力をもっていると教えて頂いた。evo はこれからも挑戦を続け進化し、新しい形で地域との関わりを持ち続けると語っており、その過程で社員一人ひとりが重要な役割を担い、企業と従業員、地域が一体となって未来を築いていくことが大切であると聞き、企業としての素晴らしい姿勢を見ることができたと感じた。特に印象的だったのは、社員に年間 40 時間の有給ボランティア制度を設け、去年は合計で 9000 時間に達したという点である。これは社員と地域の両方を重視する企業の文化の象徴であって、深く感動した。また、フィリップスさん自身が自信を持ちながらも謙虚さを兼ね備えていた点にも強く心を動かされた



C グループ(袁、中西、篠原)

私たちのグループテーマは「アンサムで見るアメリカの働き方と店づくりの違い」である。まず、働き方について印象的だったのは、スタッフの個性や自由を大切にしている点である。アメリカの多くのカフェで

は、マニュアルにしばられた接客ではなく、従業員一人ひとりが自分らしく働くことが重視されているという。

Anthem

Coffee でも、服装や接客スタイルに決まりすぎた



ルールはなく、スタッフはお客さんとの自然な会話や交流を楽しみながら働いているようだ。これは、日本のように礼儀や丁寧さを強く求められる接客とは異なり、もっと人と人との距離が近い働き方だと感じた。店づくりにおいても、地域とのつながりを重視していることが印象的だった。AnthemCoffee は「カフェは地域のコミュニティの中心になる場所」という考え方を持っており、地元のイベントへの協力や、アーティストとのコラボレーションなどを積極的に行っているという。店内のデザインにもこだわりがあり、居心地の良い空間をつくることで、お客さんが長く滞在できるようにしているとのことだった。日本との違いを感じたのは、アメリカはスピード重視で働く人にとっての3rd place となるように気楽な雰囲気を重視している、日本はどちらかというとコーヒーを純粹に楽しむためにコーヒー屋を作っており、すこし重ためな雰囲気になっていると感じていた。さらに、面談を通して、働く人同士の関係もフラットで、お互いの意見を尊重し合う職場環境が築かれていることが伝わってきた。上司と部下の上下関係が強すぎず、スタッフ全員が対等に話し合える雰囲気がある点も、日本との大きな違いだと感じた。アメリカは多文化国家手のこともあり、多様な人種からの人気を得られるように、月に一回新商品を出し、スタッフさんに試飲をしてもらい、色んな新しいチャレンジをしている。例えばエスプレッソに紅茶を入れたり、各地域の特産物にあわして、コーヒーの新作を出している。今回のオンライン面談を通して、アメリカのカフェでは「個性」「つながり」「自由」が大切にされていることを学んだ。これらの考え方は、日本の働き方や店舗運営を考えるうえでも、大いに参考になると感じた。

D グループ（岡部、細永、當間）

私たちのグループテーマは「多文化社会におけるアジアのスーパーマーケットの今後の発展」である。宇和島屋を選んだ理由としてアジア食材を取り扱うだけでなく地域社会とのつながりが強い点に注目したことが挙げられる。宇和島屋は、地域に暮らす多様な人々の生活を支え、文化交流の拠点ともなっている。地元根ざした経営を行いながら、利用者のニーズに応える柔軟さを持っている点も特徴的であり単なるスーパーを超えて多文化社会の一部として機能していると考えられる。こうした特徴を踏まえ、宇和島屋は多文化社会におけるスーパーマーケットの今後を考えるのにしていると考えた。

シアトルの宇和島屋では、日本食を中心に様々なアジアの食品が使われており、地域の文化的な背景に合わせた商品展開が行われていた。関税や輸入規制といった国際的な影響が、身近な職の流通や価格に直結している点はとても興味深かった。店舗では品質や本物らしさが重視されていて、顧客との信頼関係が大切



にされている。また、ホームレス支援や季節ごとの行事など、地域社会とのつながりも意識されていた。多様なバックグラウンドを持つ人々が関わる中で、アジア文化を発信しながら、持続可能な形でビジネスを営み家抵抗とする姿勢が印象に残った。

シアトルの宇和島屋を訪問して強く学んだことは、多文化社会の中で企業が果たす役割の大きさだった。店舗では日本食を中心に多様なアジアの食材が扱われており、地域に住む人々の文化的背景に合わせた柔軟な商品展開が行われていた。その姿から、多様性を受け入れることが企業の成長につながることを実感した。また、関税や輸入規制といった国際的な制度が価格や流通に直接影響している事実を知り、グローバルな視点で物事をとらえる重要性を学んだ。さらに、品質や本物らしさを大切に、顧客との信頼関係を築く姿勢やホームレス支援や地域の行事への参加といった社会との結びつきから、企業は経済活動だけでなく地域社会に貢献する存在であることを理解できた。これらを通じて、文化、経済、社会の三つの側面が相互にかかわりあっていることを深く学んだ。

E グループ(成松、田中、瓜生田)

現代は SNS やインターネットの普及によって、スマートフォン一つで誰もが手軽に様々なコンテンツを楽しめるようになりました。その影響でテレビの需要は減少し、今後もテレビ離れは加速すると考えられています。そこで私たちは、テレビがどのように選ばれ、存在価値を維持していくのか、また情報化社会においてテレビ局がどのように対応しているのかを学びたいと思いました。特に日本ではローカル局の衰退が課題となっているため、アメリカでは地域に根ざした放送局がどのように工夫し、信頼できるメディアとして生き残っているのかを知りたいと考え、シアトルの地元テレビ局である komotv を訪問しました。

私たちは komotv のアンカーの方にリモートでお話を伺い、番組の制作やテレビ局の現状について多くのことを学びました。komotv はただニュースを取り上げるのではなく、常に「視聴者にとって何が必要か」を第一に考えて番組を作っていることが強調されていました。地域密着型の放送局として、生活に役立つ情報や災害などの緊急情報を迅速に伝える責任があると同時に、Twitter や TikTok といった SNS を活用しており、常に視聴者の関心を探っていることも印象的でした。また、アンカー自身も現場に足を運び、視聴者の声を直接受け止めることで地域社会との信頼関係を築いているとお話しされ、その姿勢に強く心を打たれました。

さらに、アンカーの方の働き方について伺った際、午前 2 時に起床して昼まで働き、仮眠を取った後に再び取材や準備に取り組むという多忙な生活を送っていることを知りました。その中でも「情報を視聴者に届けること」を使命として努力されている姿は非常に印象的で、その責任感が komotv の信頼を支えているのだと実感しました。情報があふれる現代において、人々の声に耳を

傾け続ける姿勢こそが人気の理由なのではないかと感じました。



今回の訪問を通して、私たちはニュースやメディアの役割について改めて深く考えることができました。ニュースは出来事をそのまま伝えるだけではなく、取材から編集、放送に至るまで多くの人が協力し、正確さと同時に「伝わりやすさ」を追求していることを学びました。特に、言葉や伝え方ひとつで受け取られ方が変わるという点から、情

報発信者に求められる責任の重さを強く実感しました。また、報道は情報を届けるだけでなく、地域との信頼関係を築き、人々の安心や安全を支える重要な役割を果たしていることも理解することができました。この経験を通じて、私たちはテレビの存在価値を改めて考えるとともに、自分達がニュースを受け取る際にもその背景にある努力や工夫を意識するようになりました。

F グループ(山城、川本、鶴田)

私たちのグループは、前期に「資金繰り」「環境問題」「マネジメント」という三つのテーマを設定した。また、アメリカと日本における違いについて重きを置き、シアトル大学 Athletics Department を訪問し、サッカー部のコーチである Pete Fewing 氏にお話を伺った。まず「マネジメント」の観点では、職場文化やリーダーシップのあり方について学ぶことができた。アメリカ



カの職場は平等でフレンドリーな雰囲気があり、上司と部下の距離が近い。Fewing 氏は「Walk around Leadership」という言葉を用い、普段から従業員と気軽に会話をし、信頼関係を築くことの重要性を強調していた。また、公の場では従業員を褒め、改善点は個別に伝えるなど、個人を尊重する姿勢も印象的であった。日本の年功序列や厳格な上下関係と比較すると、柔軟で開かれた組織文化があると実感した。次に「資金繰り」の観点では、大学スポーツを運営する上でいかに資金を確保するかについて具体的な説明を受けた。シーズンを戦うための短期的な資金調達に加え、長期的には基金や卒業生からの寄付を積み重ね、組織を継続的に支えている。例えば、卒業生が遺産を大学に寄付するケースも多く、地域社会や OB との強いつながりが資金基盤を形作っている点は、日本の大学スポーツとは異なる特徴であると感じた。さらに「環境問題」の観点では、2026 年のワールドカップに向けた取り組みが紹介された。シアトルには試合のために 80 万人規模の観客が訪れると予想され、大学施設も練習場として活用される予定である。そのため、グラウンドにはリサイクル水を利用する排水システムが導入され、芝の維持にも化学肥料ではなく自然由来の方法が用いられている。持続可能性を意識した運営は、環境保全への意識が高いアメリカ社会を象徴していると感じた。

今回の訪問を通じて、私たちは日米の違いを多角的に知ることができた。マネジメントにおけるオープンなコミュニケーション、資金繰りにおける寄付文化、環境問題への先進的な姿勢などは、日本の社会や組織を考える上でも大きな気づきとなった。単なる比較にとどまらず、異なる文化や制度に触れることで自分たちの常識を相対化できたことは大きな収穫である。今回得た学びを、今後の大学生活や社会理解の基盤として活かしていきたい。

二週間の宝物

岡部 紗花

この夏、シアトルで二週間海外研修に参加し、アメリカの社会や文化、制度について多くの発見があった。まず、感じたのは街の広さだ。住宅街とダウンタウンがきっちり分かれており、移動には必ずバスや車、地下鉄といった交通手段がないと不便だと感じた。バスの料金は日本と違って一律で分かりやすい一方で、時刻表通りに来ることが少なく、遅れるだけでなく早く到着することもあり、日本との違いに驚いた。気候については、シアトルの夏は湿度が低くカラッとしていてとても過ごしやすく同じ夏でも湿潤気候の日本とは大きく違うことを実感した。夜も遅くまで明るく、一日を長く感じられたのも印象的だった。また、物価の高さにも驚かされ、外食や日用品、お土産の値段にも買うたびに驚かされた。一番印象に残ったのは人との関わりである。シアトルの人々はとてもフランクで、初対面でも気軽に話してくれる人が多いと感じた。特に船でのインタビューでは快く受け入れてくれる方が多く優しい心でありふれた人々が多く、私の心も温まった。日本とは違い、挨拶だけでなく「How are you?」といった短い会話を交わすことが日常的だった明るくオープンな雰囲気の中で過ごすうちに、言葉の壁を意識しすぎず自然にコミュニケーションを楽しめるようになった。そして、シアトルの裁判所や領事館を実際に訪問することによって日本とアメリカの法制度や教育制度の違いを実際に体験して考えることができた。とても貴重で有意義な二週間にすることができたと感じた。



最高の家族

袁 淳岳

このシアトルでの2週間が人生の一つの宝物となりました。正直シアトル行くまでにドキドキがいっぱいでみんなとちゃんと仲良くできるかが心配でしたが、この2週間を通じて家族と同じぐらいとても親しい仲間になったのがこのシアトルでの一番の収穫でした。

更に、一番印象に残った出来事は領事館での職員の方々の話でした、元々自分は法学部に入ったからには弁護士になり、生涯この仕事にこだわって生きていくと考えていました。それが自分にとっての一種の正義で一つの道に貫くことが筋だと考えていました。しかし領事館での職員の話聞き、自分の考えが少し変わりました。最初に領事館で話して下さった日本人職員の方は年齢関係なく自分のやりたいことがあったらすぐに行動し、他分野での活躍する姿はとても凛々しくて、自分も色々な事に挑戦し色々な人と出会えるようになりたいと考えようになりました。

シアトル行く前ではもう海外での経験はこの一回だけいいと考えていたがこの留学を終え更に色々なところに行きたいと考えようになり、このシアトルでの経験自分にとって一番いい刺激となり、もっと大学のうちから海外にいて自分の視野を更に広めていきたいと考えようになりました。来年のニュージーランド研修まで自分の英語力をもっと高め、またこのメンバーで行けることを祈っています、シアトルでの2週間はほんとにありがとうございました、先生たちのおかげでほんとに充実した夏休みとなりました。これからもっと頑張ります！



アメリカの社会、文化、制度

川本一輝

シアトルでの滞在を通じ、日常生活の些細な違いから、文化や社会制度が個人の行動や意識に与える影響を実感した。まず、コンビニエンスストアでは注文からドリンク作りまでを自分で行うセルフサービスが一般的で、日本のように店員に任せる習慣とは大きく異なる。初めは手順を覚えるのに戸惑ったが、自分で判断して行動することで、注意力や計画性が自然に養われることに気づいた。また、スーパーでは品物の陳列や分量の表示が細かく、日本の多くの生活場面で店員やシステムに任せることが多いのと比べ、自分の選択や工夫が結果に直結する仕組みが徹底されていた。物価の高さもあり、計画的に買い物をする意識が日常に組み込まれていることも印象的だった。

さらに、ライフスタイルの違いにも強い印象を受けた。私のホームステイ先のホストファミリーは、休日や買い物に車で出かけることが多く、車での移動が日常生活に密接に組み込まれていた。日本でも車や公共交通を使う場面はあるが、家族単位で車を頻繁に利用する生活は新鮮で、移動の自由度や便利さの享受の仕方について改めて考えさせられた。また、街中ではサービスの自動化や公共交通の効率的な運用により、自分の判断や行動が日常の結果に直結する感覚を肌で体験できたことも大きな学びだった。

これらの体験から、私は社会制度や文化の違いが個人の判断力や主体性に直結することを学んだ。便利さや安全性を当たり前とする日本の生活も、アメリカのように主体性や効率性を求められる環境と比べると、

受動的になりがちであることに気づいた。この経験は、日常の行動や選択を意識的にを行い、効率性と主体性のバランスを考える契機となった。



シアトルでの生活

中西 由依

私はこの 2 週間の海外研修を経て、日本とアメリカの違いを学びました。その中でも、私が特に驚いたものを 3 つ挙げます。1 つ目はライフスタイルについてです。これはプレゼンテーションの時にも話しましたが、アメリカではお風呂とトイレが同じ部屋であることがほとんどです。そのため、バスルームを使用していない時は、扉を開けたままにしておくことがマナーでした。私はこの事実に関心せず、1 週間経ってから気になって調べたことで気付きました。日本では「開けたら閉めなさい」という教育がなされていたので、私にとって衝撃的でした。2 つ目は社会システムについてです。日本では現金さえ持っていれば、使えない場所はありません。しかしアメリカはその逆で、クレジットカードが使えないお店がなく、現金が使えないところが多かったです。3 つ目は習慣についてです。私のホストマザーは週に 1 回の頻度で海や湖に泳ぎに行きます。これはアメリカ全土ではなく、シアトルが海や湖に面しているこそこの習慣かもしれませんが、例え海が近くても日本では毎週泳ぐ習慣はありませんでした。他にも、私より年下のホストファミリーが車を運転してくれたことにも驚きました。シアトルでは 16 歳で自動車免許を取得出来たのです。以上が、私がアメリカと日本を比較して気付いたことです。



二週間のシアトル研修を終えて

細永 柚菜

シアトルは街全体が自然にあふれており、道路や大学内でうさぎやイタチを目にしたり、公園や海辺の景色がとても美しかった。人々はアウトドアを楽しんでおり ALKI BEACH という海に行った際夕方にもかかわらず多くの人がビーチバレーや海水浴をしていた。また、シアトルの人々はとてもフレンドリーで、すれ違う人々同士が気さくに会話をしたり、バスを降りる際 THANK YOU と言って降りる人たちがたくさんいた。日本ではあまりないので印象的だった。交通面ではバスが予定時間に来ることがほとんどなく、常に遅れていた。そういったところで公共交通機関はやや不便に感じた。その面では日本は電車やバスが発達しており、移動がスムーズであると再認識させられた。食文化の面では、日本食レストランも多くあったが、アメリカならではの大きなサイズの料理やカフェ文化も楽しめた。今回の研修を通じて、日系アメリカ人の歴史や、アメリカにおける差別や人権に関する法律について学ぶことができた。多様性を尊重する社会の在り方や、権利意識の高さに触れたことは非常に印象深く、日本との制度の違いを知るきっかけにもなった。それぞれの良さを感じることができ、国際的な視野を広げる非常に貴重な経験となった。また仲間と一緒に学ぶことで、英語への意識がより高まり、少しずつ英語力が身についたと感じる。互いに意見を交換したり、刺激を与えあうことで成長できたと感じる。



シアトルでの生活を通して

瓜生田 朝子

2 週間のシアトルでの研修を通して社会や文化の中に日本とは異なる価値観がとて多くなと感じた。まず公共交通機関について、日本より料金が安く、市内にはライトレールやバスなど様々な移動手段が整っていた。しかし、日本のように時間通りに来ることは少なく、到着が遅れることは日常的にあり、日本の正確さに慣れていたためとても驚いた。また、シアトルは坂がとて多く、バスに乗っていると椅子から落ちそうなるほどの急な坂道が続いており、日本の都市との地形の違いもとても実感した。

また人との関わり方も大きく違った。シアトルでは道を歩いているだけで服を褒められたり、気さくに話しかけられたりすることもありその社交性にも驚いた。日本では知らない人に話しかけることは警戒される傾向があるが、初対面でも自然とコミュニケーションが生まれたり、そういった日本にはないオープンさがとても印象的だった。

そして一番の学びは自己表現のあり方である。私は失敗や恥を恐れて発言したりすることを日本ではあまりしてこなかったが、アメリカでは質問や発言こそが相手への関心を示す行為であり、積極的に発言していくことが重視されていた。重要なのは正解を述べるのではなく自分の考えを示すことなのだと気づき、今後は失敗を恐れるのではなく、積極的に意見を発信する力を身につけたいと思った。

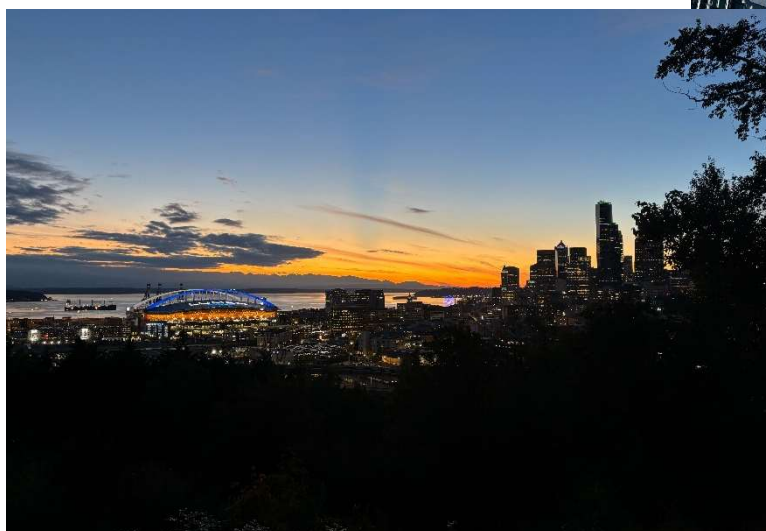


アメリカの社会、文化、制度

山城乃輝

アメリカでの生活の中で感じたことは、まずホームステイの中でアメリカの街中にいると危ない人がたくさんいるので 19 時から 20 時ぐらいには家に帰って夜ご飯を食べた。夜ご飯は基本的にメキシコ料理のタコスやブリトー、ハワイの伝統食のポキ丼を食べた。箸はほとんど使わずにスプーンを使うのが普通だった。

アメリカでの朝食は日本に比べて量が多く食べるのに時間がかかった。基本的に、ヨーグルトやオムレツ、サラダ、コーヒーを朝食で食べた。アメリカの気候に関しては、日本に比べて日中は涼しくて朝は少し寒いと感じるくらいまであり長袖が不可欠になるような環境だった。物価に関しては、日本に比べて高価で一回の食事だけで 2000 円を超えるくらい高価だった。しかしアメリカのアウトレットに訪れた際、アメリカのブランドは日本に比べて安価だった。対して、日本のブランドであるユニクロは、アメリカでは 2 倍近い値段で売られていてとても驚いた。アメリカの交通に関して感じたことは、レイルウェイを基本的に使用したが日本に比べてわかりやすかった。しかしバスは日本に比べてわかりづらかった。しかし 5 分おきにバスが来たりするので不便だと感じなかった。



シアトル研修の感想

鶴田遥己

私はシアトルでの研修が初めての海外だったこともあり様々な違いを見つけることができました。特別な違いとしてホームステイを経験したことから、家族のあり方について知ることができました。日本の家族では、親子で喧嘩した後は何日も口を聞かない、お互いが会話を嫌い距離を取る、などが一般的だと私は考えています。アメリカでは日本と逆で、熾烈な親子喧嘩をした次の日に家族でご飯を食べに行きパーティーを行っていました。私は次の日には仲良く映画を見ている親子に驚きました。喧嘩後に距離を置くのか、逆に距離を縮めるのかが家族の在り方に関わってくるとわかりました。また、4人家族であるにもかかわらず車が5台もあることに驚きました。人が多い時は7人乗りの車、急いでいる時はスポーツカーなど時と場合に合わせて車を利用しており、経済的な余裕を見せてつけられました。

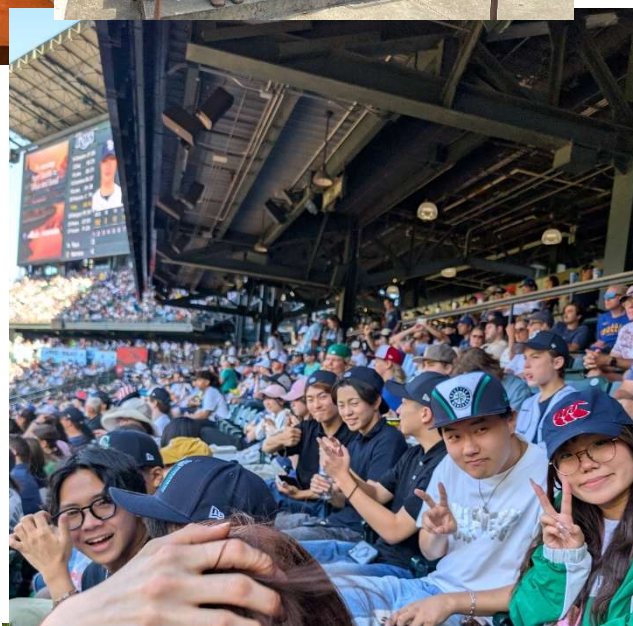




シアトル研修の感想

荒木優衣

この短期留学を通して、アメリカの社会や文化の違いを生で体験することができた。交通では、バスを降りるときに窓の上にある黄色い紐を引いて合図する仕組みに驚いた。日本ではボタンが主流なので新鮮だった。また、バスが予定時刻より早く通り過ぎてしまうこともあり、日本の正確さとの違いからアメリカらしい自由さを感じた。歩行者信号も印象的で、日本は残り時間を点滅で知らせるのに対しアメリカでは数字で秒数が表示され、デザインの違いを実感した。生活面では、スーパーのパンやマフィンが大容量で「アメリカンサイズ」を体感できて嬉しかった。カフェやショップでは店員とお客さんが気軽に会話を交わしており、人との距離が近くフレンドリーな雰囲気が良かった。街中には多くのゴミ箱が設置されていて便利さと環境意識の高さを感じた。食文化ではベジタリアンやヴィーガン対応のメニューが多く大学近くのアイス店でも選択肢が豊富で感心した。アメリカの人々の笑顔の明るさが特に印象に残った。私も同じように笑顔で人と接したい



海外経験から感じた日本の良さと課題

成松 真央

私は初めて海外に行き、日本の住みやすさとアメリカの自由さを強く感じました。特に印象的だったのは、人々のコミュニケーションです。街中で知らない人同士が気軽に会話を交わしたり、実際に私たちに話しかけてくれたり、日本ではない光景で、人との距離感の違いを実感しました。

また交通制度にも差があり、アメリカでは車での移動が日常的でした。バスやライトレールなどもありましたが、日本ほど便利ではない印象でした。ただ、アメリカのバスは区間内であれば同一料金という仕組みで、お得に感じました。また、電動キックボードなどもありましたが、多くの人が2人乗りをしていたのが、日本では捕まってしまう行為なので不思議に感じました。

さらに物価の高さも印象に残りました。日本の1.5~2倍ほどの値段で、チップ文化により食事代もより割高になります。しかし、料理の量が多くシェアや持ち帰りが一般的である点は、日本との大きな違いでした。

一方で、医療や教育の費用負担も大きく、格差が生まれやすい面も見えました。私自身アメリカの病院にかかり、治療を受けた際に高額な



治療費に驚き、日本の健康保険制度のありがたさを痛感しました。

この経験を通じて、アメリカの文化や制度との違いを学ぶと同時に、日本の強みや課題を見直すことができました。異文化を知ることは、自分の価値観を広げる大切な機会であると実感しました。



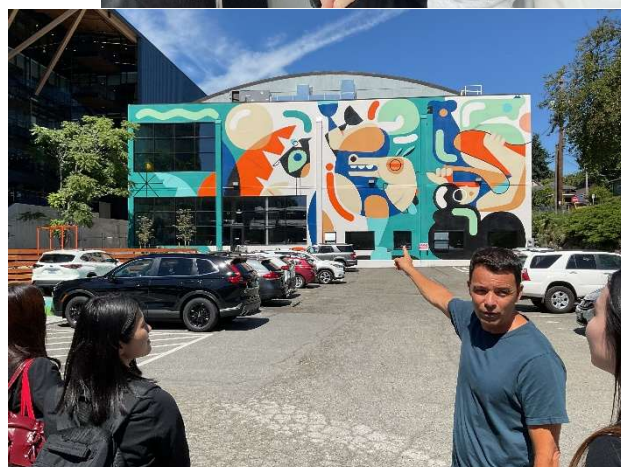
環境はその人生を大きく変える

中村茉莉衣

私はシアトル研修の2週間で一生でもかけがえのない体験をすることができた。それは私の価値観や人生に対する意識や気持ちの持ちよう、人とのコミュニケーションの考え方などに大きく影響したと思う。その中でも、日本と比較した中で特に大きな差を感じ、面白く思ったのは、アメリカでのライフスタイルとワークスタイルだ。

私のホームステイ先では、ホストマザーが週一回の出勤で残りはオンラインでしており、今回の受け入れがしやすくなったと話していた。またアメリカでは在宅ワークも主流であるため、時間の余裕があり、湖に泳ぎに行っていたり夜は夕食を軽めにして自分の時間を大切にしており日本とは時間の使い方が大きく違っていた。アメリカと日本でのこういった違いは、やはり働くことへの考え方の違いにあると思う。日本領事館でも冬美さんの話を聞いてもそうだが、アメリカは個人でかなり独立していて自分を大切にしている。だからこそ、食や仕事にあまり時間をかけず、それが販売してある食品やサービスの質にも影響しているため日本と雰囲気が大きく違うと感ずるのだろうと思った。日本と比較して違う点を挙げていき、その要因を考えるとほぼ繋がっているからそこも今回作成する上で面白いと感じた。

ただ、何を大切にするのかは文化や国が同じであれど、大きく違うことも多くの人と接することで学んだ。要はその人の環境次第で、物事の捉え方や価値観は大きく変わるのだと思った。



アメリカ社会に関する感想

工藤悠士

アメリカの街を歩いていると、公園や道路をはじめ多くの場所でホームレスの人々を多く見かけた。このような光景から経済格差の大きさを実感した。ホストファミリーの家庭は家も大きく車を何台ももっているなど比較的裕福な生活を送る人々が多かったが、通学中や帰宅中に見かけたホームレスの生活との差に驚いた。

また、日本との違いとして信号機に着目した。日本の信号機の多くは、赤・黄・青の3色で意味を使い分けている。アメリカでは、交差点に一時停止の標識があり、信号が常に点滅している。1台ずつ交差しながら進んでいた。これは、アメリカの代表的な国民性である自己主張の強さがこのルールを可能にすると感じた。日本は、譲り合いの心が強いのでアメリカのような交通ルールを採用すると渋滞や事故が多くなると思う。

アメリカ人の習慣として印象に残ったことは、毎朝のようにスタバでコーヒーを購入して職場や講義に持ってきていることだ。ホームステイ先でも毎朝コーヒーを飲むかどうか聞かれるので、アメリカ人は毎朝コーヒーを飲むことが当たり前なのだと思った。ホームステイのメンバーのたいきは、コーヒーが嫌いなので毎朝断っていたが、自分と慶太郎は、熱々のコーヒーを頑張って飲んでた。アメリカ人は、通勤・通学中にスタバに立ち寄るくらいの余裕を持って行動しており、少し遅刻してしまう時間であってもコーヒーを買うことは欠かせないようだ。日本とは大きく違う習慣のため驚いた。



シアトルの動物

田中 陽代

今回の留学を通して、私はアメリカはとてもアニマルフレンドリーだと感じました。日本では公道での散歩やドッグラン以外で犬を見かけることあまりないですが、シアトルではバスや地下鉄などの公共交通機関、飲食店や服屋などの店内にも犬と一緒に入っている人をよく見かけ、最初は慣れないということもあり、安全面などが心配でした。しかし、何日か過ごすうちに、犬たちが吠えたり攻撃的になることがほとんどないことに気づきました。周囲の人々も自然に受け入れており、犬も人慣れしていることが理由かなと思いました。さらに、日本では野良猫などを見かけることがありますが、シアトルでは一度も目にしませんでした。これは行政や地域社会が積極的に保護活動をしているからなのか、あるいは動物を捨てないという社会的な意識が徹底しているからなのかわかりませんが、動物にとっていい環境だと感じました。

こうした経験を通して、アメリカでは「ペットは家族の一員である」という価値観を強く持っているのが伝わってきました。日本でも同じ考えが広まりつつありますが、シアトルでの生活からは、その意識の定着度やペットとの生活のしやすさの違いを体感することができました。私が留学を通して感じた、一番大きい日本とアメリカのギャップでした。



シアトル研修

豊見山 優紀

シアトル研修を通じて、特に印象に残ったのはライフスタイルの違いである。私を受け入れてくれたホストファミリーは、家の中で靴を脱ぐことが多かったが、日本のような「玄関」の概念はなく、リビングルームに土足で入ることもあった。また、日本と比べて国土が広いため、一軒家が主流であり、庭やガレージを備えた住まいが一般的であるという印象を受けた。

さらに文化面で驚いたのは、レディーファーストの習慣が日常生活に根付いていることである。バスや電車に乗り降りする時やお店に入る際など、私が後から来た場合でも先に通してくれることが多く、その考え方が自然に生活に浸透していることを実感した。

研修当初、映画やドラマの影響からアメリカに対して治安が悪く威圧的な印象を抱いていた。しかし、実際には私の拙い英語を理解しようとしてくれたり、日本の文化に関心を示してくれたりする人々との交流を通じ、その先入観は大きく覆された。また、市街地では日本ではあまり見かけない物乞いをする人やホームレスを目にし、豊かな国でありながら経済格差が大きいことも実感した。

今回の研修を経て、将来的には長期留学も視野に入れたいと考えるようになった。そのためにも、今後は語学力の向上をより一層努め、英語を使って難なくコミュニケーションを取れる力を身につけたいと強く感じている。





感想

當間 仁美

アメリカで生活して1番感じたのは物価の高さだ。日本ではコンビニやスーパーで安く買えるものでも、アメリカでは全体的に値段が高く、円安の影響もありあまり日本円に換算しないで買い物をするようにしていた。さらにアメリカにはチップ文化があり、初めて経験した私はとても戸惑った。どのくらい渡せばいいのか、渡さなくてもいい場面があるのかわからず、毎回少し緊張してしまった。日本では表示された金額だけを払えばいいので、その違いが大きく印象に残った。

交通の面ではアメリカは切符を買うのではなく「ORCA カード」というICカードを使うのが一般的で、日本のSuicaやICOCAに少し似ていると感じた。ただし料金の仕組みは大きく違い、乗る距離に関係なく一律で、しかも乗る前に先に支払うという点が独特だった。日本では電車やバスだと距離で料金が変わるのが当たり前なので、最初は不思議に思った。支払い方法も、電車は入口の端に置かれているだけなので無賃で乗る人がいるのではないかと疑問に思った。

物価や交通の違いを体験して、日本では当たり前の思っていたことが実は国ごとに大きく異なるのだと実感した。戸惑うことがとても多かったが、それも含めて新鮮な体験だった。



シアトルで見て、感じたこと

杉山 優奈

2週間のシアトル研修を無事に終わらせて安心すると同時に、寂しさも感じている。今回が私にとって初めての海外だったため、何もかもが新鮮だった。

まず驚いたことは、アメリカ人の優しい人柄だ。フレンドリーに接してくれることは十分に理解していたが、いざ現地に行くと、やっぱり驚かされた。ホストファミリーも本当に優しく接してくれた。私は髪色や服装、ネイルなどアメリカには中々ないような外見をしていたが、道行く色んな人に綺麗、可愛いと嬉しい言葉をかけてもらえた。日本では全く面識のない人に気さくに話しかけたり、オーバーリアクションで何かを褒めたりすることは早々ないので、今まで経験したことのないようなコミュニケーションを取れたと思う。

物価の高さにも本当に驚いた。日本でも最近ではどんどん物価が高くなっているのに、それを遥かに上回るほど、アメリカの品々は高かった。水を買うのも、スタバを買うのも、外食するのも、すべてにかなりのお金がかかった。外食をすることが多かったが、高くて量もとても多いという印象だった。

食事、お風呂、ごみの分別、マナーなど、日本と違う文化を沢山経験したが、何よりも一番苦しかったのは、言葉が通じないことだった。ネイティブの人たちと沢山会話をしたが、言いたいことがとっさに出てこず、うまく伝えられないことがとてももどかしかった。この悔しさから、本気で、英語を頑張ろうと強く思った。

2週間、本当に有意義な日々を過ごすことが出来た。このシアトル研修は、今後のわたしの人生において、一番の誇りになると思う。それくらい、毎日充実して、新しい視点や知識を身に付けられて、貴重な時間を過ごすことができた。



濃すぎた二週間

篠原 弘一

この二週間のシアトル研修を通じて、普段の大学生活では得ることのできない多くの学びと貴重な体験をし、数多の思い出を作ることができた。研修で特に印象的だったのはフェリーでの現地の人に自分たちで決めた質問をしたことだ。会話が全て英語なので最初は緊張したが、相手の方が真剣に耳を傾け、丁寧に答えてくれた事で安心し、流暢でない英語でも伝わることが実感できた。伝えようというパッションが相手に伝わると、相手も一生懸命に受け止めてくれて伝わり、言葉の壁を超えられるのを経験できたのは大きな自信に繋がった。ホームステイでも、英語だけで自分の考えや気持ち、状況を表現するのは容易ではなかったが、ホストマザーと積極的に会話を重ねるうちに少しずつ慣れた。異なる文化や宗教の中で生活することの楽しさと難しさ、相手と理解しあえて時の達成感は今でも忘れられないほど強く感じる事ができた。シアトルの人はフレンドリーで、日本では無いような簡単なコミュニケーションをたくさん取り、明るい気分で生活することができた。anthem コーヒーショップへの企業訪問では、日本とシアトルのコーヒー文化の違いやアメリ



カならではの食文化やルール、店の食材や素材へのこだわりなどを知ることができた。日本では落ち着いてゆったりと楽しむ場、アメリカでは日常の一部として人々を繋ぎ、何杯かを楽しむという興味深い文化の違いがあった。また、スターバックス一号店も訪れ、その店舗限定のお土産をたくさん買うことができた。また、日本から4年もシアトルに留学している大学生に遭遇

し、珍しく日本語で会話ができたり写真撮ってくれたり、不思議な経験もでき、思い出になった。この研修を通して、異文化理解と語学力の重要性を実感するとともに社会制度や貿易や経済、日系人の事について幅広く知ることができた。この貴重な経験を今後の学習と生活に活かし、より広い視野を持っていきたいと感じた。



感想

吉津慶太郎

私がシアトル研修は、今までの人生の中で一番新しい経験をした2週間だと断定できる。大学に入学してなにかしたいと考えて、このプログラムに申し込んだ。はじめはアメリカに行ってみたいという軽い気持ちだったが、今では

行ってみて良かったなと感じた。実際にシアトルに行く前の授業ではシアトルについて学び、アメリカの司法制度や企業訪問について考えることができ現地の活動にすごく役にたった。初めての海外だったのですごく緊張していたが、ホームステイファミリーやスチューデントアシスタントの方が親切だったのでその不安は杞憂だったように感じる。しかし、初めは英語で意思疎通をとるのが難しく、日本との生活のギャップにも苦勞した。アメリカ人はしっかりと意思を伝えないと自分の意思が伝わらないので、自分の意思を積極的に伝えることを意識するようにしてからアメリカでの生活が楽になって日本とのギャップに慣れてきたように感じる。シアトル大学では、主にアメリカの法制度や文化について学んだ。シアトル大学の環境はとても勉強しやすく、留学ってこんな感じなんだと実感した。シアトル大学での勉強以外では様々な観光名所や食べ物を食べられて文化についても学べた。この2週間の経験は間違いなく自分の人生を変えた。これからも様々なことにチャレンジしたい。

